

「風」と「水」

—エロワ・ルクレールによる「夜」克服の道—

手塚 奈々子

はじめに

前稿〈「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」—エロワ・ルクレールによるナチスへの抵抗—⁽¹⁾では、エロワ・ルクレール (Éloi Leclerc, 1921-2016. 以下ルクレールと表記) の「夜」の体験とナチスへの抵抗のあり方について執筆した。本稿では、彼がいかにかこの「夜」を克服したか、彼の生涯とその省察、人間理解から論じる。

彼の生涯にわたる問いは、強制収容所に向かう列車の中で遭遇した仲間の悲惨な死の際にアッシジの聖フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」が何故迸り出たか、である。この現象を巡り、自分が何故フランシスカンになったのか、フランチェスコの兄弟愛は残酷な人間の間に本当に存在するのかと問う。この「夜」体験後、そして強制収容所からの帰還後、自分の存在によってトラウマを克服しようとし、生涯にわたりこの「夜」から来る問いに答えを出そうと努め、証した。「夜」の後で、フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」を、主としてユング心理学で解釈し生きた。彼のこのトラウマ克服は、心理学を中心にしているが、更に哲学、神学、聖書を用い、彼の理性・感性・祈りによって克服しよ

うとしたすさまじいものである。それは彼個人にとどまらず、現代の私達にも訴えかけるものがある。

本稿では、Ⅰとして彼の生涯—召命と問い—、Ⅱとして彼の「夜」克服（Ⅱの1：兄弟なる太陽の賛歌、Ⅱの2：聖書から、Ⅱの3：新しい誕生、Ⅱの4：離脱と清貧）、Ⅲとして人間の尊厳を論じる。

Ⅰ. 生涯—召命と問い—

ルクレールは、12歳のとき、アッシジの聖フランチェスコに魅せられる。フランチェスコの、人間に対してだけでなく全被造物に至る「兄弟愛」に特に魅せられる。そうして18歳にてフランチェスコ会士として生きるべく修道会入りする。

「私がアッシジのフランチェスコの生涯を初めて読んだのは、ほんの12歳であった。…この人の中で私の心を捉え魅惑していたのは、一番小さいもの、一番地的なものも含んでの全ての存在との彼の測り知れない兄弟的交わりの能力であった。…18歳の年に…これ（※フランチェスコ的インスピレーション）がアミアンのフランチェスコ会士達の修練院に私を導いた。ここに1939年9月入会した」⁽²⁾。

彼を惹きつけたフランシスカニズムの魅力とは、それまでの修道制のあり方とは違う面すなわちこの世から退いて神のみを求める修道制とは違って、フランシスカニズムにはフランチェスコの精神に基づき世間に開かれた兄弟的交わりがあり、修道制をこの世から退かずにむしろ「この世そのものを修道院」として捉える面である。

「《ご婦人、これが私達の修道院です。》（※修道院はどこか問われ、丘で目

「風」と「水」

の届く限りの地一帯を見せて言ったフランチェスコ会士達の言葉) …かつて自分を神に奉献したいなら、全面的に神に属するために、修道院の中に隠遁していました。そこで籠っていました。世間を断って、そこで神とひとつになっていました。修道院とは、世間から守る囲いでした。しかし、見て下さい、フランチェスコと共に囲いは全く大きく開かれます。もう囲いはありません。修道院は、世界そのもの、神の世界でもある自然と人々の広大な世界なのです」⁽³⁾。

召命のきっかけともなったフランチェスコの「全被造物に至る兄弟愛」と「この世界が修道院」と捉える視点がルクレールを惹きつけたとともに、後にナチスによる「夜」体験でトラウマを大きくし、「本当にこの世に兄弟愛はあるのか？」との問いが生じることになる。霊的・心理的・身体的トラウマに悩まされ、ルクレール自身が「復讐したい」という気持ち自分があつたと書いている。

「救急診療隊で、ひどく損なわれた健康状態でとりわけ心の中にあの不安にさせる問いを抱えて帰って来ました。すなわち、人間の兄弟愛なんてひとつの夢なのではないか？人は単に獣に過ぎないのではないか？それも自然のあらゆる動物の中で一番残酷な獣なのではないか？私はたくさんの罪悪を見、接してしまった！そして私自身も自分の中に復讐に渴く獣が目覚めていると感じていました」⁽⁴⁾。

「人間の兄弟愛は可能なのか？これはひとつの理想郷、幻想ではないのか？」⁽⁵⁾

「かの問いは常にここにある。今日もまた来て、私の喉を締めつける。時折、夜に少し光を探して落ち着かないまなざしを天に向けるように

なったこの年老いた私を、主が赦して下さいますように」⁽⁶⁾。

しかし、ベネディクト会の修道院での夜の静けさの体験が、彼に少しばかり新天地を開く。これは、神のみの美しい世界に触れたからではないだろうか？ここから、「神のみが神である」（人間は神になれない）⁽⁷⁾という彼の生涯続く主張が出てくるのではないかと？

「Kerbénéat のベネディクト会大修道院院長に招かれました。…小川の物寂しいせせらぎが、私の傷ついた精神によりよく調和していました。すなわち、私に新鮮な風を運んでくれていました。少しずつ苦悶はその締め付けをゆるめました。もっと自由に私は呼吸していました。平和、夜の沈黙の中に浸った修道院の兄弟的な謙遜な平和が、ひそかに私の精神の中に浸み通って来ていました。

《人間の間に兄弟愛は可能なのか？》，しかしこの問いはそこにありました」⁽⁸⁾。

この少しの癒しの体験後、全力を挙げての「夜」克服、そして「証し」の生活に入る。

II. 「夜」克服

「フランチェスコを聞き始めると同時に、私は、私達を非常に苦しめていた悪の根を省みていました。…ナチスの収容所の後ろには、ある特殊な悪がひそんでいました。すなわち、精神の倒錯異常です」⁽⁹⁾。

ルクレールは、収容所体験を「この非人間化の経験 *cette expérience de déshumanisation*」⁽¹⁰⁾と呼んでいる。そしてナチスの行ないは精神

「風」と「水」

の倒錯に由来し、この精神異常は人間が神になろうとする原罪から引き起こされているとする。

「死の収容所の恐ろしい経験と戦いながら、真の人間関係の実現には以下が障害を作っていたということが私にはますますわかってきました。すなわち、権力への欲望、他人を支配しようとする欲望、まさに他人としてその劣等性を彼に感じさせようとする欲望でした。この欲望は、必然的に他者をその人間性において否定することに導きます。そしてもし彼が抵抗するなら、彼をただ単に排除することに導きます。実は、死の収容所は、あらゆる社会の中で多かれ少なかれヴェールで覆われ隠れた形の下で再会するひとつの現実の、悲劇的な残忍なそして仮面なしの例証でありました。権力は、自己を絶対と見做す時、他の声を聞かせる人々すべてを格下げ、排除することを目指します」⁽¹¹⁾。

「神なしで神であることは、人の昔からの夢であり、起源から絶え間のない誘惑です」⁽¹²⁾。

「大罪は常にあります。遂にはこの自己とぜひとも世界の所有をとというのは、無限の存在に生まれることを人間に妨げ、本質的に賜物である命から人を排除してしまいます」⁽¹³⁾。

ところで、このような人間の所有欲に対して、フランチェスコは抗ったとする。「生涯フランチェスコは、人間の中にあるこの所有欲に対して抗うことをやめなかった」⁽¹⁴⁾。

しかし、ルクレールにとって、もし「兄弟なる太陽の賛歌」への疑いが自分にあるならば、それはフランチェスコに対する疑いであり、フラ

ンシスカンとして召命を受け生きてきた自分自身の生、アイデンティティへの疑いにもなる。こうしてフランチェスコの存在理解への深まりが始まり、「兄弟なる太陽の賛歌」の心理分析となる。

Ⅱの1；アッシジの聖フランチェスコ作「兄弟なる太陽の賛歌」（※別称「被造物の賛歌」⁽¹⁵⁾

いと高い、全能の、善い主よ、賛美と栄光と誉れと、すべての祝福はあなたのものです。いと高いお方よ、このすべては、あなただけのものです。だれもあなたの御名を呼ぶにふさわしくありません。私の主よ、あなたは称えられますように、すべてのあなたの造られたものと共に、わけても兄弟である太陽卿と共に。太陽は昼であり、あなたは、太陽で私たちを照らします。太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、いと高いお方よ、あなたの意味を担っています。私の主よ、あなたは称えられますように、姉妹である月と星によって。あなたは、月と星を天に明るく、貴く、美しく造られました。私の主よ、あなたは称えられますように、兄弟である風によって。また、空気と雲と晴天とあらゆる天候によって。あなたは、これらによって、ご自分の造られたものを扶け、養われます。私の主よ、あなたは称えられますように、姉妹である水によって。水は有益で謙遜、貴く、純潔です。私の主よ、あなたは称えられますように、兄弟である火によって。あなたは、火で夜を照らされます。火は美しく、快活で、たくましく、力があります。私の主よ、あなたは称えられますように。私たちの姉妹である母なる大地によって。大地は、私たちを養い、治め、さまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。私の主よ、あなたは称えられますように。あなたの愛のゆえに赦し、病と苦難を耐え忍ぶ人々によって。平和な心で耐え忍ぶ人々は幸いです。その人たちは、いと高いお方よ、あなたから栄冠を受けるからです。私の主よ、あなたは称えられますように、私たちの姉妹である肉体の死によって。生きている者はだれでも、死から逃れることはできません。大罪のうちに死ぬ者は不幸です。あなたの、いと聖なる御旨のうちにいる人々は幸いです。第二の死が、その人々を

「風」と「水」

そこなうことはないからです。私の主をほめ、称えなさい。主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。

一読しただけでフランチェスコの全被造物への愛が伝わってくる賛歌であるが、伝記ですでに言及がある旨ルクレールは指摘する。「彼（※フランチェスコ）は、被造物を、たとえもっとも小さいものにも、兄弟あるいは姉妹の名で呼んでいました」⁽¹⁶⁾。「彼の心に生まれつきある感受性すべてが、すでに彼を全被造物に対して兄弟的にするのに十分でした」⁽¹⁷⁾。

さて、ルクレールは、この賛歌に特にユング心理学における「象徴」の読みを行う。Ballarini も以下のとおり指摘している。

『『心理学的な（あるいはよりよくは心理分析的な）解釈』

聖フランチェスコの生涯の中でイメージ、シンボル、夢の重要性は有名である。まさにこの面、すなわち『兄弟なる太陽の賛歌』のシンボルの中で研究された面が、エロワ・ルクレールにとって、聖人の内奥のパーソナリティの分析そして神に向かつてのその道行きの分析に、深層心理学の光で特にC・G・ユングを先例として、導引となっている」⁽¹⁸⁾。

ルクレールは、ユング心理学応用の鍵として、フランチェスコが、「太陽」「月」「星」「風」「水」「大地」などを、ただの自然名称としてだけでなく、それぞれを「兄弟」あるいは「姉妹」と呼ぶことに着目し、外的世界と内的世界のつながりを語る⁽¹⁹⁾。

「この『賛歌』の意味は、物質的要素を示すことでとどまっていない。然るべく価値付けされた宇宙の現実、他の事柄の表現である。それらは、それら自身無意識の言語である。普遍的宇宙は、ここでは内的宇宙

《と》象徴をなしている」⁽²⁰⁾。

ルクレールは、それぞれのシンボルの意味を外的世界と内的世界のつながりから語るが、以下の3組を特に採り上げる。

「私達にはこのように相次ぐ兄弟の3組があります。すなわち、兄弟なる『太陽』—姉妹なる『月』、兄弟なる『風』—姉妹なる『水』、兄弟なる『火』—姉妹なる『地』」⁽²¹⁾。

ルクレールはこの「賛歌」全体を解釈しているが、その中の「兄弟なる風」と「姉妹なる水」の組の解釈で、闇から光への立ち直りを集中的に語るので、本稿で採り上げる。

私の主よ、あなたは称えられますように、兄弟である風によって。また、空気と雲と晴天とあらゆる天候によって。あなたは、これらによって、ご自分の造られたものを扶け、養われます。私の主よ、あなたは称えられますように、姉妹である水によって。水は有益で謙遜、貴く、純潔です。

IIの2；聖書から

さて、ルクレールは、聖書ですでにこの「風」と「水」の組み合わせが語られていることに注目する。彼は特に以下の聖書箇所を挙げる⁽²²⁾。

創 1:2 「闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」

出 14:21,22 「主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので…イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き…。」

エゼ 36:25,26 「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。…わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。」

「風」と「水」

ヨハ 3:5-8「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

エゼ 47:1-9「水が神殿の敷居の下から湧き上がって、東の方へ流れていた。…彼はわたしに言った。『これらの水は東の地域へ流れ、アラバに下り、海、すなわち汚れた海に入って行く。すると、その水はきれいになる。川が流れて行く所ではどこでも、群がるすべての生き物は生き返り、魚も非常に多くなる。この水が流れる所では、水がきれいになるからである。この川が流れる所では、すべてのものが生き返る。…』」

ヨハ 4:11,14「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。…わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

ヨハ 5:4「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっているか、いやされたからである。」

以上の聖書箇所に関して、以下のとおりルクレールは述べる。(なお、聖書において、ヘブライ語のルーアッハにも、ギリシア語のプネウマにも、「息」と「霊」と「風」の意味があるので、ルクレールも「息」と「霊」と「風」の3重の意味で使っている。)

「聖書の伝統の中で、『水』—『霊』(『息』)の組み合わせは、最も重要な役割を果たしている。水の上の創造者・『息』を想起させる『創世記』の最初のイメージから、『水』と『霊』による再生の預言的イメージに至るまで」⁽²³⁾。

「水の上を漂う『ヤーウェ』の『息』という聖書のイメージは、創造の前兆となっている。…同様に、水と風のヨハネのイメージは、新しい誕生、上からの誕生を表している。復活徹夜祭の典礼は、水の祝福において、キリストによってもたらされた新しい命を示すために創世記1章2節のイメージを再び取り上げている」⁽²⁴⁾。

「それは、常に生かす水である。…主の天使によって動かされ風に吹かれてからのみであった」⁽²⁵⁾。

「貴重な水とは、生ける水である。この生ける水は、侵害されていない深みから、隠されている聖なる泉から迸る。例えば、預言者エゼキエルのヴィジョンの中では、その通ったところですべてを肥沃にし、死海の水すら清くし生かすことまでしに行くあの生ける水の流れである。そしてこれはその泉を、再建された神殿の下に持っている」⁽²⁶⁾。

「生ける水は、一番深い井戸よりも更に深い泉を常に持っている。これは、外的世界との接触なしの泉であり、手つかずの未開拓の聖なる (intacte, vierge, sacrée) 泉である」⁽²⁷⁾。

「イエスの公的な第一の歩み、そのミッションの端緒となるのは、ヨハネが非常に驚いたことには、川の水に降りることである。そしてこれはキリストが『霊』を受け取る水と謙遜に一致している。水と『霊』！イエスご自身が言っておられる。すなわち、『神の国』に入るには私達はこの両者から生まれる必要がある、と」⁽²⁸⁾。

IIの3：新しい誕生

「風」と「水」

キリスト教の根本的な人間理解は、創世記 2:7「主なる神は…土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」から、「人は神の霊によって生きる」であるが、ルクレールもこの理解に立ったうえで人間を論じる。そして、特に創世記とヨハネ福音書を中心に人間の再生を語り、「夜」体験と対比して「霊における人間の新しい誕生」を語る。すなわち創世記の「霊」と「水」（水の上に霊が漂う）とヨハネ福音書の「水」（生ける水）と「風」（風は思いのままに吹く）の結び付きから、新しく生まれることを語る。Ballariniも以下指摘している。「遠くから来る兄弟的な組み合わせは、風と水の組み合わせである。すなわち、『初め』から、つまり神の『霊』（息）が水の上を漂っていた時、紅海の過越し、エゼキエルの清い水と新しい霊に、そしてヨハネによって告げられた水と『霊』による再生に至るまで。兄弟なる風はひとつの開かれた世界に導く。風はあらゆる障害をなぎ倒し、常により遠くに運ぶ力である。風と兄弟であるためには、物事から絶対的に離れている（*distaccato*）こと、『霊』の刷新に開かれていること、超えるものに常に備え用意あることが必要である。…風に結び付けられた姉妹なる水は、再生の組み合わせ、刷新される命の組み合わせを作る。…そして貞潔な（*casta*）のは腐っていない水であり、自分を神の『霊』の息吹に全面的に捧げることができるものである。最終的に言えば、この『兄弟性』は、救われることの喜びであり、主の『霊』によって変容された世界、人間の一番高い運命に開かれている世界を語っているのである」⁽²⁹⁾。

「風」との結び付きについて、ルクレールによれば、風と兄弟になるには「たぐさんの物事から離れている（*détaché*）が必要であり」⁽³⁰⁾、「清貧である（*pauvre*）必要がある」⁽³¹⁾。「風とのこの兄弟化は、内的な剥奪と精神の開きを表している」⁽³²⁾。

すなわち、「風」と「水」による人間の新しい誕生に際し、「風」と兄弟になるには、たくさんのものから離脱する清貧の状態の必要をルクレールは語るのである。

IIの4：離脱と清貧

「兄弟なる太陽の賛歌」について、聖書からの「風」と「水」の組み合わせ解釈に基づくルクレールによるフランチェスコ理解は、以下にまとめられる。

- ・フランチェスコは、被造物との共生・共存を語るが、同時に被造物から離脱してもいた。
- ・「風」には、形容詞がない。すなわち、「風」は超越する神の霊である。
- ・フランチェスコは、「風」すなわち聖霊（神の霊）に開かれて生きていた。聖霊に開かれて生きるには、被造物からの離脱と清貧が必要である。フランチェスコの「清貧」とは、「離脱」とともに生じるものである。

ルクレールによれば、新しい誕生は、この世のものから離脱し、所有や支配を放棄するとき、神の霊に開かれ、生じる。この離脱とは、被造物の放棄や切断ではない。この離脱とは、被造物と共生・共存しながらも、支配欲・独占欲・執着から離れていることである。所有や支配の放棄とこの世のものから離脱している人間に、神の霊が住む。

「水」については、ルクレールは以下のとおり注目している。

- ・「貴重な」「貞潔な」という形容詞が使われている。なお、「貴重な」という形容詞は、聖体を置く場所⁽³³⁾についてフランチェスコは使っている。
- ・「貴重な」というのは、「貞潔な」「封じられた」という意味でもある。ルクレールは、ともに、intacte, vierge, sacrée, そして détaché という形容詞を挙げている⁽³⁴⁾。これは洗礼の水として用いられることも

「風」と「水」

挙げている。そして「貴重な水」とは、「生ける水」のことであり、貴重な、貞潔な、封じられた、生ける水は、聖なる源から迸る。これは、エゼキエル書の水でもある。

- ・支配欲の放棄と自分の知恵の放棄，すなわち清貧の状態が神の霊と結び付ける。自分を霊の息吹に捧げる。この清貧の状態から聖なるものへの内的な開きが恵まれる。こういう人に霊が住む—水の上に霊があるように（創 1:2）。そうして新しく誕生した者が，神的な子になるのであり，証し人となる。

「このような人は，神秘的に主の『霊』に結ばれているのである。『霊』は，彼の上で休む—原始の水の上の創造者である『息』のように，姉妹なる『水』の上の兄弟なる『風』のように。…この結び付きから，新しい誕生が生じる。人間の神的な誕生，人間の中での神的な子供の誕生である。すなわち，《彼らは御父の子らであるだろう…》⁽³⁵⁾。「兄弟的な人は，いつも御父の証し人である。彼を見る人は，御父をも見るのだ」⁽³⁶⁾。

フランチェスコの清貧は，根本的に離脱から生じている。ルクレールによるフランチェスコの清貧とは，聖書の「残りの者」—イスラエルの残りの者，そしてイエスに連なるものである。「フランチェスコの後ろに全聖書がある。そこには神の民の全歴史がある。とりわけヤーウエの『貧しき者』の経験と歌がある」⁽³⁷⁾。

なお，フランチェスコの「清貧」について，強調され目立つのは物質的な清貧であるが，フランチェスコの清貧の真の意味は，あらゆる力，権力欲，所有欲の放棄である旨，古典の Leonardi，近年では Dalarun によっても指摘されている⁽³⁸⁾。しかし，ルクレールによるフランチェスコの清貧理解は，離脱とともにある点で，従来の理解よりもより深くフランチェスコを理解していると思われる。

そして、ルクレールの「夜」から来る省察によれば、「清貧」とは、「神のみが神である」ことを認める（自分が神にならない）ことである。「すべてが失われる時、そこに残るのは、この超越的な現実である。すなわち、神がおられる」⁽³⁹⁾。

Ⅲ. 人間の尊厳

ところで、清貧に反した生き方は、所有欲と支配欲による生き方であり、こういう生き方をすれば神の無限に自己を開けなくなり、神に向かって成長できなくなる。

「人間は自分自身にこもって存在するような、定まった限界に最終的に閉じ込められた存在ではありません。《人間は一パスカルが書いていますが―、無限に向けて造られています。》人間は、無限の偉大さに開く動きの中で真に存在するのです。…自分自身を神の像として再び見出します。『至高なるかた』を切望する人間は、『超越』に触れた存在なのです。…人間は『無限』に向けられています」⁽⁴⁰⁾。「世を無限に超えているかたは、無限に『共に』あることも欲されました」⁽⁴¹⁾。

ルクレールは、神は無限であり、それに応じて人間も無限に成長すると語る。この人間理解と西洋社会の「人権」という考え方は、創 1:26,27「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。…』神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」から生まれた。人間の尊厳は、神の像と似姿として造られたことにある。教父から連なる考え方であるが、ルクレールも、「神は愛である」と「神は三位一体である」ことから、神それ自体が交わりの永遠の関係であるとし、人間はその神の像としてこの関係を生きるように招かれて

「風」と「水」

いるとする。

「神は、孤立している存在ではなく、ひとつの交わりです」⁽⁴²⁾。

「神性のただ中に本質的な永遠の交わりがある。生命の交わりがある。…神はこの交わりである。神は、その存在自体において交わりである。…神の各位格は、他の位格への関わりであり、他への献身である」⁽⁴³⁾。

「神の像に創造された人間もまた関係の存在である」⁽⁴⁴⁾。

「三位一体の神の像に創造された人間は、交わりの中で自己実現するように宿命づけられている。この交わりとは、神の三つの『位格』の交わりを反映し延長するものである」⁽⁴⁵⁾。

「愛の神秘、三位一体の交わりは、清貧の神秘でもある」⁽⁴⁶⁾。

「イエス・キリストの神は…それゆえ孤立した神ではない。神は愛の中での交わりの神秘である。その愛は常に他者へ向かう。すなわちその愛は他者への関係である」⁽⁴⁷⁾。

「Agapè, ヨハネの福音書は、私達に神の愛は根本的に交わりであると示す。愛の中での交わりである」⁽⁴⁸⁾。

この人間理解に即して、フランチェスコおよび「兄弟なる太陽の賛歌」の意味について、ルクレールは以下のとおり語る。

「封建的な組織の策略に捕らえられ、それ自体領主になった教会の中で、フランチェスコは福音的清貧の解放者である息を再び見出し、そこから人間間に新しい兄弟愛の歩みを作りました」⁽⁴⁹⁾。

「物理的な現実を直接対象とするという自明の意味を超えて、それゆえこの『賛歌』は、他の事柄を聞かせている。すなわち、『賛歌』は、内的経験の、霊的な生成の比喩に富んだ言語でもある」⁽⁵⁰⁾。

「宇宙の将来は、人間の内的和解に依るのでしょうか？」（※インタビューでのルクレールへの問い）

これこそ『被造物の賛歌』が表現していることです。ここでフランチェスコは、その人生の終わりに、その秘密を打ち明けます。彼は、『創造』の輝かしい意味を見出します。しかしこれは、新しい誕生の経験である内的経験からなのです。

この新しい人間になって、人は創造の意味を感知します。水、風、火は、私たちに潜む隠れた力を象徴しています。しかし、これらの力は、『賛歌』の中であらゆる破壊的性格を失っています。それゆえフランチェスコは、被造物への自分の愛情を表現するだけでなく、自分の内奥の隠れた力との和解をも表現しているのです。そして、この和解なしには、人は他の人々と理解し合うことはできません⁽⁵¹⁾。

「自然を人間化しながら、人間自身が人間化されます」⁽⁵²⁾。

ルクレールは、ナチスによる「夜」体験とそこから来る問いを、13世紀当時の十字軍などでも知られる全体主義の教会からそしてフランチェスコ会自体から来る「夜」（※会の発展や会則を巡りフランチェスコが体験した「夜」）をアッシジの聖フランチェスコが「風」（神の霊）との関わりによって克服したことに重ねて、克服しようとした。フランチェスコの克服は「兄弟なる太陽の賛歌」に表れているとし、ルクレールはそれに心理学を中心として神学的また哲学的な現代的解釈をし、それを生き、証した。

おわりに

フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」研究は膨大にある。ルクレールの研究で「賛歌」に関して、Gagnan は、「全フランシスカン霊性の総括的な統合する表現」⁽⁵³⁾と評価しながらも、ルクレールによる「兄弟なる太陽の賛歌」解釈は心理学による解釈であり客観的ではないという否定的な発言もしているが⁽⁵⁴⁾、このGagnanの発言は意味がない。

ルクレールは伝統的な神学を踏まえながら、心理学や現代哲学から「兄弟なる太陽の賛歌」を解釈する。そして自分の生きた体験から言語化し証した。このルクレールの生きられた言葉には人を打つ真があり、虚偽がない。言を生きた教父達や「修道院神学」と呼ばれる聖書の比喩的解釈を行うシトー会士達が聖書を生きたように、もし真に「兄弟なる太陽の賛歌」を生きるならば、心理学や現代哲学による「兄弟なる太陽の賛歌」解釈および聖書の実存的解釈は、今日でもナチス現象が存在する人間社会に対してより有効で意味がある。今もこの「世」の中に存在する「夜」に対して、客観的な史的解釈には限界がある。

実存に関して、ナチスの強制収容所から生還した人々の中に、V・フランクルがおり、彼は本来医者であり、帰還後ロゴ・セラピーと呼ばれる心理分析を立ち上げ、人々を癒し、『夜と霧』を書いた。ルクレールは、帰還後、フランチェスコ会の司祭として「兄弟なる太陽の賛歌」を主としてユング心理学により解釈し、この賛歌を生き、証した。これは、あの仲間の死の際に「兄弟なる太陽の賛歌」が口に上ったのは何故かという問いに対して答えを出そうとする試みであり、収容所からの帰還後でも子供のときのフランチェスコへの憧れの肯定でもあり、アイデンティティの肯定でもあり、そしてこの世の中に兄弟愛は存在するののかというトラウマ克服でもある。ルクレールが引用するH・ヘッセも⁽⁵⁵⁾、

人生後半の心理的危機の際、ユング心理学によってその危機を乗り越えた（ヘッセは、ユング派の医師の分析を受け彼のテーマは『데미アン』から変わり、霊と肉の統合を目指しその大成がノーベル賞受賞作『ガラス玉演戯』である）。そしてユング自身が、自身の心理学によって自身の問題を乗り越えた（ヘッセの父もユングの父も牧師だが、厳格な倫理だけの霊的ではない性格であった）。ユング、ヘッセ、フランクル、そしてルクレールが真に癒されたかどうかいえないが、自分の中の「医者」が真の「医者であるキリスト」によって自分を癒すということはいえるのではないか⁽⁵⁶⁾。

ルクレールは、2016年に亡くなるまであの「夜」の体験を書き続け、証し続けた。「この世に兄弟愛は存在するのか？」—この彼の問いは、現在もあるナチス現象によって生活を録音され、見られ、読まれ、管理され、挙句の果てには盗まれた自分の言葉によって嫌がらせされるといふ現実がある中で、彼に続いて証し続けなければならないと、筆者はフランチェスコ会第3会員として痛感する。ナチスによる強制収容所は終わっていない。

なお、清貧に関して、筆者はルクレールによるフランチェスコの「清貧」解釈は従来の解釈より「共存と離脱の両方を強調する」点で発展していると考える。ところで、自発的清貧には「誇り」（自分はキリストに従っている、フランチェスコに従っている）がある。強いられた清貧には「誇り」や「尊厳」が剥奪されている。イエスの福音は「貧しい者は幸いである」である。イエスの受肉の意味は真のケノーシスであり、一切の「誇り」や「尊厳」の剥奪が十字架の意味である。ところで、「誇り」もひとつの「力」ではないのか？ルクレールや尊厳が剥奪された状態を味わった者はイエスの清貧を生きたが、通常の修道者の清貧には、自分はキリストあるいはフランチェスコに従っているという誇りがある。しかし、強いられて乞食をしている者達には「誇り」も「尊厳」も

なく、ただ生きるために乞食をしている。通常の修道者の清貧は、生きるために乞食をしている者達には及ばないのではないか？そしてイエスの「清貧」とフランチェスコの「清貧」とは異なるのではないか？

注

本稿でのルクレールの直接の言葉の引用は以下フランス語原典8冊からであるが、注で書名と頁数を記す。*Le soleil se lève sur Assise*, DDB, Paris, 1999. *Le cantique des créatures ou les symboles de l'union. Une analyse de saint François d'Assise*, Éditions Franciscaines, 2014. *Le Cantique de Frère Soleil. Le chant des sources*, Éditions Franciscaines, Paris, 2013. *Chemin de contemplation*, DDB, Paris, 2010. *Le Maître du désir. Une lecture de l'évangile de Jean*, DDB, Paris, 1997. *La fraternité en héritage - Ma vie avec François d'Assise*, Éditions Franciscaines, Paris, 2015. *Saint François d'Assise. Le retour à l'Évangile*, DDB, Paris, 2019. *Pâques en Galilée ou la rencontre du Christ pascal*, DDB, Paris, 2019. 彼の思想を強調する場合は「である」調で和訳した。なお、上記に関してイタリア語訳下記4冊も参照した。*Francesco. Un sogno da Assisi*, Edizioni Messaggero, Padova, 2001. *I simboli dell'unione. Una lettura del Cantico delle Creature di san Francesco d'Assisi*, Edizioni Messaggero, Padova, 2012. *Il canto delle sorgenti (Presenza di san Francesco 28)*, Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano, 2016. *La fraternità come testamento. La mia vita con Francesco d'Assisi* (Acanti; 5), Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano, 2016. なお、ルクレールの解釈を直接論じている下記論文を本稿で言及した。Marco Ballarini, “Il Cantico di Frate Sole tra filologia, psicologia e teologia” in *Francesco e il suo Cantico. Atti del II Convegno di Pozzuolo Martesana 8 ottobre 2011*, a cura di Paolo Bartesaghi, Associazione Cardinal Peregrino, Ancora, Milano, 2012. この中の, “Un'interpretazione psicologica (o, meglio,

psicanalitica)”, pp.99-116。 Dominique Gagnan, “L’âme de François d’Assise sous le prisme de la psychanalyse d’après Éloi Leclerc” in *Collectanea Franciscana* 47/3-4, Istituto storico Cappuccini, Roma, 1977, pp.317-347。 なお、引用文中の括弧内の※と続く小文字は筆者の補足説明である。

- (1) 拙論『紀要』第51号, 明治学院大学キリスト教研究所, 2019年, pp.219-235。
- (2) *Le soleil se lève sur Assise*, pp.15-17。 なお、亡くなる前のインタビューでは、8歳か10歳の時にフランチェスコに関する本を母親から与えられ、その後カプチン・フランチェスコ会士から影響を受けたとある。彼の兄弟姉妹の中からも数名修道者が出ており、弟のルイもフランチェスコ会 (OFM) 士である。
La fraternité en héritage, pp.19-20 参照。
- (3) *Le soleil se lève sur Assise*, p.18。 ※の原典は, *Fonti Francescane*, III edizione, Editrici Francescane, Padova, 2011。(以下 *FF* と略記。) この中の *FF2022* 参照。
- (4) *ibid.*, p.31。 !はルクレールの記入である。
- (5) *ibid.*, p.29。
- (6) *ibid.*, p.29。
- (7) 注(1)の拙論 pp.226-227, 230-231 参照。
- (8) *Le soleil se lève sur Assise*, pp.33-34。
- (9) *ibid.*, p.38。 同 p.37 に、フランチェスコの *Scritti* (書いたもの) と最初の伝記を再び読み始めたとある。
- (10) *ibid.*, p.23。
- (11) *ibid.*, pp.28-29。
- (12) *Le Cantique de Frère Soleil*, p.27。
- (13) *ibid.*, p.100。
- (14) *Le cantique des créatures ou les symboles de l’union*, p.57。
- (15) 日本で読まれている庄司篤訳『アシジの聖フランシスコの小品集』（聖母の騎

「風」と「水」

士社, 1992年, pp.49-54) と, 川下勝『アッシジのフランチェスコ』(Century Books 人と思想 184, 清水書院, 2004年, pp.167-172) から引用。原典は, S.Francesco d'Assisi; "Cantico di Frate Sole", FF263。なお川下氏指摘の「わけても兄弟である太陽卿と共に」は原典にある。また, 原典の "de Te, Altissimo, porta significazione" は直訳で「いと高いお方よ, あなたの意味を担っています」となるので筆者が直訳して記載した。

- (16) *Le Cantique de Frère Soleil*, p.38. FF1145 参照。
- (17) *ibid.*, p.39. FF758, 1168 参照。
- (18) Ballarini の前掲論文 p.99。
- (19) *Le cantique des créatures ou les symboles de l'union* 内 "2-L'APPELLATION 《FRÈRE》 OU 《SCEUR》", pp.28-33 参照。
- (20) *ibid.*, p.28. 《 》 はルクレールの記入である。
- (21) *ibid.*, p.76. なお, *Le Cantique de Frère Soleil*, p.65 にもこの3組は挙げられ同様に論じられている。
- (22) *Le cantique des créatures ou les symboles de l'union*. ルクレールの明記箇所を挙げたが, 節まで明記なくても明らかに彼の考えにある節は筆者が挿入した。創 1:2, 出 14:21,22, エゼ 36:25,26, ヨハ 3:5,8 (6,7 挿入) は pp.111-112, エゼ 47:1-9 (2-9 挿入) とヨハ 4:11,14 (14 挿入) は p.126, ヨハ 5:4 (章節の明記なし) は p.122 にある。なお, *Le Maître du désir*, p.45 にも, 創 1:2b, 出 14:21b-22, エゼ 36:25-27a, ヨハ 5:3,4 は, 風と水の組として同様に挙げられている。
- (23) *Le cantique des créatures ou les symboles de l'union*, p.41. 《 》 はルクレールの記入である。
- (24) *ibid.*, pp.120-121.
- (25) *ibid.*, p.122. ヨハ 5:4 への言及である。
- (26) *ibid.*, p.126.
- (27) *ibid.*, p.126. 重要な原語を示した。

- (28) *ibid.*, p.227. !はルクレールの記入である。
- (29) Ballarini の前掲論文 pp.106-107。この p.106 の注にも創 1:2, 出 14:21-22, エゼ 36:25-26, ヨハ 3:5,8 が挙げられている。
- (30) *Le cantique des créatures ou les symboles de l'union*, p.114. 原語挿入。
- (31) *ibid.*, p.114. 原語挿入。
- (32) *ibid.*, p.115.
- (33) *ibid.*, pp.94-95. FF114 参照。
- (34) *ibid.*, intacte, vierge, sacrée は p.126, détaché は p.114。注 (27) と (30) の引用文参照。
- (35) *ibid.*, pp.129-130. 《…》はルクレールの記入である。
- (36) *ibid.*, p.264.
- (37) *Chemin de contemplation*, p.105.
- (38) Claudio Leonardi; "Il Vangelo di Francesco e la Bibbia di Antonio", *Il Santo* XXII, a cura di A. Poppi, Centro Studi Antoniani, Padova, 1982. Jacques Dalarun, *Francesco d'Assisi, il potere in questione e la questione del potere. Rifiuto del potere e forme di governo nell'Ordine dei Frati Minori* (Fonti e ricerche 13), Edizioni Biblioteca Francescana, Milano, 1999.
- (39) *Chemin de contemplation*, p.106.
- (40) *Le Cantique de Frère Soleil*, pp.26-27. 引用文中の『無限』の二重鉤括弧は筆者挿入。
- (41) *ibid.*, p.117.
- (42) *La fraternité en héritage*, p.42.
- (43) *Chemin de contemplation*, p.28.
- (44) *ibid.*, p.31.
- (45) *ibid.*, p.73. また, *Pâques en Galilée ou la rencontre du Christ pascal*, p.89 には, 「真に, 復活したキリストが本来の人間を再び見出し, 神の像に命を

「風」と「水」

回復させるのは、私達各々の中である」とある。同 pp.88-89 では、キリストによる人間の「神の像」の復元について、聖土曜日の陰府降下とあわせてルクレールは述べている。

- (46) *Chemin de contemplation*, p.115.
- (47) *Le Maître du désir*, p.132.
- (48) *ibid.*, p.127.
- (49) *La fraternité en héritage*, p.37. また, *Saint François d'Assise. Le retour à l'Évangile*, p.209 では、「フランチェスコは、封建制の戦いの聖戦の神と別れます。神は、彼にとってもう封建制での領主ではありません」とある。
- (50) *Le soleil se lève sur Assise*, p.42.
- (51) *La fraternité en héritage*, p.29.
- (52) *ibid.*, p.39.
- (53) Gagnan の前掲論文 p.327 参照。なお Ballarini の前掲論文 p.116 参照。
- (54) Gagnan の前掲論文 p.347 参照。Ballarini はこの箇所を前掲論文 p.116 の注に挙げている。
- (55) *Le soleil se lève sur Assise*, pp.101-111. 日本では『郷愁』で知られている“ペーター・カーメンツィント”についてルクレールは書いている。
- (56) 2世紀初頭のアンティオキアの聖イグナティオスから、キリストの称号に「医者」をつける見方はある。イグナティオス自身の言葉は、荒井献〔編〕『使徒教父文書』（講談社文芸文庫、1998年）所収、八木誠一訳「イグナティオスの手紙—エペソのキリスト者へ」7章2節、p.161 参照。

